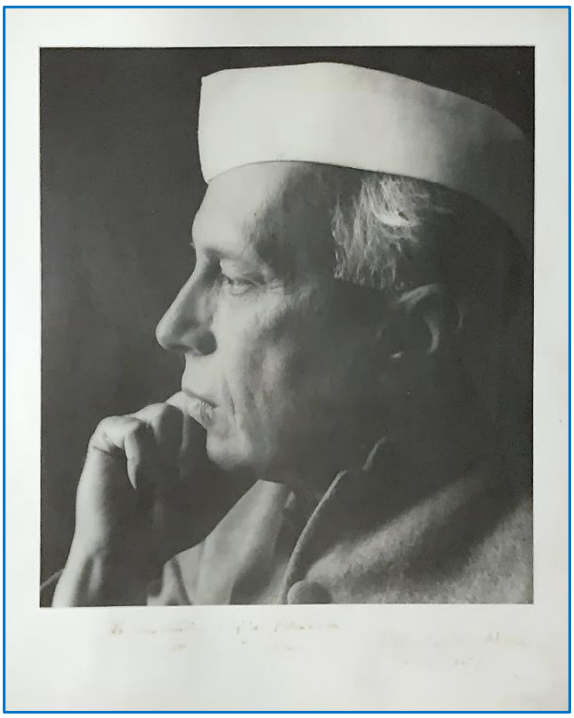
2021 年 5 月号　　題字　一萬田 尚登 第 5 代日印協会会長

月刊インド

Monthly Journal of the Japan-India Association

公益財団法人 日 印 協 会（日印間の政治・経済・文化・人的交流に貢献して 118 年）



左：
1957 年ネルー首相とインディラ・ガンジー
上野動物園訪問
（提供：インド大使館）

右：
第 2 代駐インド吉澤清次郎日本大使宛ての
ネルー首相直筆サイン入り肖像写真
（日印協会所蔵）

目次

1. 第 2 代駐インド日本大使が見たネルー首相 …… P. 3
2. 『最後の超大国インド』日本語版から英語版出版へ：出版裏話 …… P. 9
3. インドニュース（2021 年 4 月） …… P. 12
4. 新刊書紹介 …… P. 16
5. 掲示板 …… P. 18

広告削除後、目次とページを合わせるために空白ページをいれております。

1. 第２代駐インド日本大使が見たネルー首相
Prime Minister Nehru: Unknown Face Viewed by the 2nd Japanese Ambassador to India

元東京三菱銀行副会長　吉澤 建治

1955 年 6 月、亡父吉澤清次郎は第 2 代駐印大使を拝命しました。外務事務次官を最後に退官してから 6 年余りでの外交の現場への復帰でした。

吉澤夫妻 1955 年 7 月 9 日、
於 Rashtrapati Bhavan

当時のインドは非同盟諸国の雄として重きをなし、日本とも鉄鉱石、綿花の輸入先として緊密な経済関係にありました。因みに、私が勤めておりました東京銀行は戦後の海外拠点網の構築にあたり、ロンドン、ニューヨーク、サンフランシスコに次いで 1953 年にカルカッタ、カラチ、ボンベイに支店を開設しておりますが、この地域が日本の対外貿易にとって占めていた重要性を物語っているものと申せます。

インドで父は十分働き甲斐を感じるとともに親しみを覚えるに至ったようで、折に触れ在任中の思い出を私にも語ってくれておりました。退任後間もなくインドの初代大統領ラジェンドラ・プラサドの評伝を上梓しております。

インドの首相兼外相は独立以来その任にあったジャワハルラール・ネルーでしたが、日本が日露戦争の勝利によってアジアの人々を力づけるに至ったことを評価する一方、その後欧米列強と同じ帝国主義的植民地支配を進めたことに批判的であったことは広く知られていたところで、大使である父の受けた印象も必ずしも温かいものではなかったようです。ところが 1957 年 9 月の日本訪問を境に、そのネルーの戦後日本に対する見方が一変するに至ったという話を私は父から直接聞かされておりました。

このほど、コロナ禍による巣ごもりの機会に手元の資料を整理するなかで、内政史研究会の先生方に纏めて頂いた父のオーラルヒストリーにネルーの対日観が変化するに至った事情が詳しく述べられていることを発見致しました。このことを日印協会の平林博理事長にご報告申し上げましたところ、これを「月刊インド」で紹介してもよいというご懇篤なお話を頂きまして、私としてもこのネルーの対日観にまつわるエピソードはインドに関心をお持ちの皆さま方に是非とも知って頂きたい、泉下の父にとりましても願ってもないことだと思い、理事長のお申し出を受けさせて頂くこととした次第でございます。

「現代史を語る〈5〉吉沢清次郎—内政史研究会談話速記録」
（現代史料出版社）より抜粋

大使として見たインドの印象

渡辺昭夫氏（以降、渡辺）：これは全く個人的な資格でお会いになったのですね。

よければつぎに一応インド大使として行かれた話を聞きたいのですが、インド大使に行かれる頃から任期中のお話まで、何か……。

吉沢清次郎氏（以降、吉沢）：1955 年から 7 年までですね。

渡辺：それは鳩山内閣になってからのことですか。

吉沢：ええ、私が行った時には日本はまだ国連にもはいっていませんしね。

渡辺：直前でございますね。

吉沢：国連にはいったのが 56 年の 12 月ですね。それから、日ソ国交も出来てなかったわけです。まあ、日ソ国交といえば、あの時にインドに来ておった大使はフェデレンコだったかな。これが、国交が出来るというとすぐに私を呼びにきて、そして、ウォッカを飲まされて、こっちは困るものですから、閉口したことがあるのですけれどもね。そんなことがありました。

インドにいる間の私の仕事は三つあったと思うのですがね。一つは、日印両国の私有財産の返還問題。これはあの当時 B・C・センといったか、その後、国連の食糧機構ね、ローマにある、あそこの事務総長で行きまして、もうとうに辞めましたけれどもね。大分長くやっていました。それが大使に来ておったわけなのです。その時に私はインドへ行くことになって、それで、当時いまの財産返還の問題は、もう話が始まっておったのですが、これはね、日本側の財産は、むこうが戦争が始まると同時にエリアン・プロパティということで、むこうがすっかり管理をして、そして帳簿に全部書いてあるわけなのです。ところが、日本にいたインド人の財産というものは、例のチャンドラ ボースの問題がその後起こってきたものだから、そこであの時に解除したのでしょうね。それで、その辺があまりスッキリしていないのです。ところが、それを利用して、インド人というものは、そういっては何ですけれども、ジュウ以上に手強いというか、殊にインドのマルクーリ（協会注、マルワーリ？）というのは、これはジュウ（協会注、ユダヤ）以上に、商売抜目がないことに定評があるのですけれども、こういう連中が多いわけなので、すね。

そういう連中は、何もしなかった者が、どこの空襲の時に焼けたとか何とかということを終戦後に申告してくるわけなのです。ところが、こっちが明白に嘘だというものは、そういうふうに出来ますけれども、中にはこちらが立証出来ないものもあるわけなのですね。そういうものをだんだん何して、私が任命される前に、たしか金額にして、当時の金額で、インド人の財産として日本が補償しなくちゃならんものを、二億ぐらいになっていたと思うのですね。

渡辺：二億円ですか。

吉沢：ええ、円で。ところが、日本人の財産で、インド側で例のエリアン・プロパティとして、これはもうちゃんとハッキリわかっているものが、十五億前後だったんじゃないかな。それを、センが、一時お互いが両方でもって帳消ししようとすることを、言い出したことがあったのです。それを私が赴任の時に懸案の一つとして持っていったわけなのですが、しかし、それはとうとう私がいる間には解決しなかったのです。で、私が帰ってきたのは、57 年で、58 年になってそれは解決したわけなのです。

それが一つと、それからもう一つは例のガット、三十五条の問題ね。これはもうご承知のようにガット条約のうちに三十五条というものがあり、これを援用すればその国に対して差別待遇をしてもいいということで、当時インドは日本に対して援用除外をしていなかったので、こいつを引っ込めさせようという問題がありました。ところがこれも私がいる間に解決せずに、帰ってきた年の 1958 年に解決した。これは情勢がだんだん変わってきておったから。

それから、もう一つの問題は、通商協定の締結です。というのは、私行った時はもちろん商売はあったのですけれども、今日においてもなかなか伸びないのですけれども、私が行った当時一億ドル前後ぐらいで往来があったのではないのですか。それが日印平和条約のうちの一ヵ条で、お互いに最恵国待遇を付与するという一条がある。それでやっておったわけなのです。それで、そんなこっちゃいかんから、ひとつ正式な通商協定と、それからゆくゆくは通商航海条約にいくものを作らなくちゃいかんという、これがもう一つの問題だったのです。これも私がいる間いろいろ骨折ったけれども出来ずに、帰ってきた途端に、58 年に一挙にしてその三つの問題が解決してしまったのです。

渡辺：みんな 58 年ですね。

吉沢：それをね、私の行った時は、いまの日印関係に比べるというと、よく私は言うのだけれども、まるでぬるま湯につかったようなもので、出ると寒いし、そうかといっていつまでもはいっているわけにはいかんという状況で、ということは、私が着任した時に記者会見があったわけなのです。記者会見をやる前には、前におる連中からいろいろ話も聞いて心構えはして行ったのですけれども、実際会見をやってみて驚かされた問題が二つあるわけなのです。

その一つは、日本はまだ占領下にあるんじゃないかという問題。それからもう一つは、例のチャンドラボースの問題で、チャンドラボースはまだ生きているという話があるじゃないかと、どうだろうかということです。占領云々の問題は、冗談じゃないと、まだ日本にはアメリカ軍が駐留していると、だけど、これは平和条約が出来

て日本が独立を回復をして、それとは別に安保条約というものを何して、安保条約の規定にあって一定のアメリカ軍が駐留しているんだということです。

それから第二のチャンドラボースの問題は、私も全然予期していなかったのです。まさかと思っていたところが、いまでもボースは健在だということがあるわけなのですね。それからこれは正面切って何してもしょうがないから、あなたのいまの質問と同じようなことが日本の歴史上に二つあるんだという。一つは源義経で、一つは西郷隆盛であると、それではぐらかした格好なのですがね。そういうところへいったわけなので、それで、ネールをはじめとして何となくよそよそしい。そういう一つのイラストレーションとして申し上げると、いま、ワシントンに行っているK・Mでしたかな、カウルというのが行っていますが、カウルというのはついこの間まで、去年、一昨年まで外務次官をしていた。これは、私が行った時には、ジョイント・セクレタリー、というのはまあ局長級でしたね。それでカウルは、日本関係には直接に関係がなかったのだけれども、何かの用事でもって私が話しに行った時に、彼は、カウルという奴は、実に失礼な奴だと思うのだけれども、サンフランシスコ条約には、当時はインドは参加していませんから、それで、インデアン、エンパイアーですか、つまり、英領インドの後継国はパキスタンということになっているのです。けしからんじゃないか。

1957年岸首相のインド訪問
（提供：総理府）

ですから、インドとパキスタン、これはどっちが英領インドの後継者なんだというようなことになったらもう英領インドに決っているじゃないかと、それなのに日本は少なくとも法的関係では、パキスタンを英領インドの後継者として認めていると、こんなことはないじゃないか、ということ を言う。そういう空気の中にいたわけなので、ネール自身にしてからが、私はネールに会った時に、 それはあなたの国は200年あまりイギリスに首根っ子を押さえられてきた国なんだから、独立してもやっぱりどうしても西からのインフルエンスを受けることは了解出来ると、だけれどもいまは立派な独立国になっているのだから、もう少し東のほうに顔をお向けになったらどうですかということを言って、その時にちょうど日本とブラジルの文化協定が出来たあとだったものですから、ひとつ文化協定を結ぼうじゃないですかと、それで、ちょうどブラジルと出来た条約がありますから、このコピーをお届けしますから係官に研究させたらどうでしょうかと言って、これは結局出来たのですがね。出来たのですけれども、実際は有名無実でほとんど活用されていない。その後五人委員会とかいろいろなものが出来ていますからね。それはなくても、実効を発揮してなくてもたいしたことはないと思うのですけれども、そんなことを言ったことがあるのですけれども、まあ、ネール の日本に対する態度というものもそう温かではなかったですね。

で、彼は自叙伝の中に、「ちょうど少年の頃に日露戦争があって、有色人種が白人に対してあれだけのことが出来るということで非常に感銘を受けた」ということは言っているのですけれども、私どものその当時の感じでは、そういう感情を日本に対して持っていたけれども、しかし、第二次大戦中のアジアにおける日本の乱暴ぶりというものは、彼の考えからすると、非常に反発を感じるという感じは残っていたんじゃないかと思うのですね。ところが、私の在任中にインドのネールが日本を訪問したわけなのです。

渡辺：あれは先生が在任中でございましたか。

吉沢：ええ、57年の9月ですからね。で、その前に当時の副大統領の有名な学者のラダクリシュナンが訪問したのです。その時も私が日本に帰ってそして何したのですが、不幸にしてラダクリシュナンは、日本に訪問中に、たしか奥さんが亡くなられて、京都かどこかへ行っているのを急に予定を変更して帰ってしまったのですけれども、ある程度の日本の現状というものに対する認識は持って帰ったと思うのですね。

それから、日本からネールに対する招待というものは、これは国会議員なんかが行くとどうも盛んに濫発をしておったけれども、そのたびにネールは、そのうちに行きましょうということであったけれども、いよいよ彼が来ることになったのは、岸総理が招待したのに対して、これを受けた、それが57年に実現したわけなのです。ところが、ネールが、その当時はインディラ・ガンジー夫人（協会注、ネールの娘）を一緒に連れてきたのですが、日本に対して案外だという感じを持ったんじゃないんですか。

これはたとえば私の着任した年ですから、55 年に私が行った時にはまだロシア訪問から帰っていなかったですよ。それで、ところが一例を申しますというと、ネールを箱根へ連れて行って、そして富士屋で一晩泊って、帰りは十国峠を通って熱海へ出て、当時のことですから熱海から電車に乗って東京へ帰ったことがあるのです。箱根へ行く時には雨が降っていたのですけれども、それにもかかわらず村外れみたいなところで、おばあさんが孫を背中におんぶして、そして小さな紙の旗で歓迎しているというようなところを、よほど印象を受けたと思うのですね。そこで彼は、日本でも非常に歓迎を受けた、その前にロシアに行った時はそれに勝る非常な歓迎を受けた、しかし、ロ シアにおける歓迎は、これは作られた歓迎であって、オーガナイズド・アンド・レジメンテッド・ウエルカムなのです。ところが日本のやつは本当のボランタリー・ウエルカムであるという。

広島原爆資料館でのネルー首相
（提供：読売新聞）

そういうことで、奇しくもネールの訪問の時に東京で早慶戦があったのです。というのは、ネールが来た当時に彼にどこかの大学でもって名誉学位をやったらどうかという話が起こって、それで東大へ持っていったところが、東大はそういう先例がないということで断ったわけなのです。それ から慶応に持っていったところが、慶応は二つ返事でもって受け入れたわけなのです。そうしたら今度は早稲田が承知しないのです。それで早稲田がやるというわけで、私は当時帰ってきて行動を一緒にしたものですから、慶応では、いまはいろいろ出来ているのでしょうけれども、福沢諭吉が演説をしたという演説館がありますね。あれはせいぜい 200 人ぐらい 200 人もはいれないのかな、小さなものですね、木造の。そこで名誉学位の授与式をやったのですけれども、学生はそんな ことでは承知しないわけなのです。それで図書館の建物のバルコニーから学生に対して一応の演説 をするという場面があったわけなのです。

これはね、慶応のほうは大したことはなかったけれども、早稲田の時は大変なことで、大隈講堂で式はやって、今度は外へ出て車へ乗ろうとするというと、学生がすっかり取り囲んじゃって身動きが出来ないのですよ。私らはそのあとをついて行かなくてはいけないのだけれども、なかなか自分の車に辿りつけないという状況です。
それから、奈良へ行った時は、これも一緒について行ったのですけれども、あの辺で百姓家にはいって、当時はいわゆる三種の神器というのは、テレビに、電気洗濯機に、冷蔵庫でしたね、その 時代で、何気なく百姓家にはいってみたらそれがあるのですよ。もうびっくりしちゃったらしいのです。

そんなことで、私はネールの日本に対する考え方というものが、57 年の 9 月の日本訪問でぐるっと変わったと思うのですね。というのは、その前は私らに対する態度でもそう特になんということはなかったけれども、帰って間もなく大げさに言えば日本の文化の紹介のような催しをしたこと があるのですよ。ところがこれに当初まだ経済大国にそろそろなりかけの時分ですからね。そう何じゃなくて、寄せ集めに日本の人形や、トランジスターとか、そんなものを並べるくらいな、きわめて、いまから言ったらお恥ずかしいものだったのですが、それにネールに「来てくれ」と言ったらネールが来るのです。 来て、そしてそこで間に合わせのお茶か何かたててご馳走をするというと、ちゃんと坐ってやる。インディラ・ガンジーの如きは、そのお父さんについて来た時に、日本人のことだからほうぼうからお土産を貰って帰る、いろいろなものがある。その中に日本の着物があるわけなのですね。それを着て出るというわけなのですね。帯は結べないから、大使館の奥さんが行って結んでやって、窮屈な思いをして足袋をはき草履をはいて出てきて、お茶にちゃんと坐ったのですね。そんなことは、日本訪問の前にはちょっと想像も出来ないような雰囲気だったですね。

それで、これまたエピソードになりますけれども、当時、外務大臣は藤山(愛一郎)さんがやっておって、着いた翌々晩ぐらいでしたかな、そこの山王の「賀寿老」で日本料理の宴会をやったわけなのです。ちょうど私が筋向いぐらいに坐っていたら、見ていると、出てくるものを全部食べるんだな。たしか刺身はなかったと思うのですけれども、そのほか純日本式のを全部食べるわけなのです。そこで私が 57 年の 12 月、押しつまってから帰朝命令が来て帰るという時に、ネールが、われわれ夫婦をきわめて小規模な午餐会に呼んでくれて、ネールと、インディラ・ガンジー夫人と、ガンジー夫人の主人のミスター・ガンジーというのがまだその当時在世中でしたから、それと、それからもう一人たしか親戚か何かのお嬢さんか何かがおって、6 人だけのきわめて小じんまりしたものでした。

私はちょうどネールさんのそばに坐っておったですからね。「あなたが日本に行った時見ていたら、日本料理を全部食べた」、それからあとついて歩いていると京都や何かでも同じなのですね。「だから、全部食べられましたが一体どう思われました。あれはインド料理から比べて脂肪分は少ないし、まずかったんじゃないですか」と言ったら、そしたら、日本料理については自分は三つの感じたことがある。一つはシンプルということ、それからもう一つはナチュラルだったかな、それからもう一つ、しかしホールサムだと、食べても別にあたりもせんし、きわめて衛生的というか、だということを言ったことがあるのですね。

それがね、私はネールが日本の当時の経済大国になりつつある日本の姿を見たことで、前には日本に対して多少偏見を持っておったか知らんけれども、これはやっぱり日本と一緒にやっていかなくてはならんという感じを持った一つの機縁じゃなかったかと思うのですがね。もう日本へ行った前とそのあととでは、インディラ・ガンジーが草履をはいて来たことでもわかるように何すると、それから、インディラ・ガンジーが今度は大臣になるというと、大分態度は違ってきていますけれどもね。

57 年の 9 月に来てその暮に私は帰ったのですから、ですから 58 年にはさっき言った三つのその時の懸案が解決するというようなことで、私としてはいろいろ骨を折った結果を、もう少し見て帰りたいという感じはあったのですけれども、ちょうど、あれは藤山さんのあと、いや藤山さん自身が替えたわけかな、あとは那須皓博士が来たのです。当時私はもう六十二、三でしたかな、それでラダクリシュナンなんかにあいさつに行った時、「何だ、あなたのあとへ来るのはあなたより五つも年上じゃないか」ということを言った。しかし、つい二、三日前も会ったのですけど那須さんはもう八十五歳ぐらいですか、それにもかかわらず南米のほうへ手を出したりなんかしてね、矍鑠たるもので、もうこっちが年が若いのにおいぼれているから、なるほど、ラダクリシュナンがそう言っていたけれども、やっぱりえらいものだなと思って話をしたのですけれどもね。

渡辺：当時のどうなのですか、サンフランシスコ講和条約で、インドが加わりませんでしたね。それが日本に対して好意的な立場からと、それからたとえば……、

吉沢：好意的というか……、

渡辺：極東裁判なんかの場合も例のパール判決だとか、その当時の日本の受取り方ではインドというのは非常に……、

吉沢：非常に好意を持っているというように思ったですけれども、しかし、実際に行ってみると、最初は私はそうでなかったと思うのですね。ところが、56 年ぐらいからだんだんインドの外貨事情が苦しくなってきて、借りたい放題に借りておったやつを、金利を払っていかなくてはならないと、そのうちには、借りたやつでもって金利を払えば残らんという状勢がぼちぼち出はじめてきた時分ですからね。ですけれども、B・K・ネールという、これはネールの何になりますかね、甥ぐらいになるのですかね。彼が財務省の次官をやっていましてね、当時まだ日本から金を借りるなんていうようなことは考えていなかった時分ですけれども、私に、日本からもそろそろ金を貸してもらわなくちゃならんようなことになってきたというようなことを言ったことがありますけれどね。

彼はなかなか頭の切れる男で、その後、ワシントンの大使になって行きましてね。いまはどこかのガバナー（協会注、知事）をしているはずです。ところが、その後円借款の問題とか何とかいろいろな何が来て、いまではむこうはヤイノヤイノと言ってくるということになっている。しかし、それでありながら日本とインドとの間の貿易というものは一向どうも伸びないということで、いまはせいぜい二億ドルぐらいのところじゃないですか。

というのはね、大蔵省へ行くと、インドは非常に評判が悪いのですね。彼らは金を貸してやっても決してありがたいということを言ったことはないというようなことでね。そうかといっても人口は貧乏人ばかり揃っているのですけれども、五億何千万、そろそろ六億に近づこうという、マンパワーという点では非常に何がありますし、ただ、教育というような問題もありますけれども、しかし、資源も相当ありますし、まあそれはインドネシヤほど資源はないでしょうけれども、インドネシヤは石油はあり、そのほか非鉄金属等ありますけれども、インドは鉄鉱石が非常に多いですから ね。鉄鉱石はその後オーストラリヤというものが出てきたのですけれども、また、最近はブラジルあたりで非常に豊富なものが出てくるのですから何ですが、これはちょうど私のいる時に、南のほうのパイラディラという話が出はじめて、いまはその後開発をして鉄道をつけて含有分 60%以上の鉱石が、埋蔵量何十億という非常なあれですからね。

ただね、インド人というものは商売の話になるというと、なかなか渋いんでね。

渡辺：政治的な事件としては、ちょうどバンドン会議とか何とかいう、いわゆる中立主義ですか、そのチャンピオンでネールがやっているという、そういう時期ですけれども、そういうあたりの雰囲気というのは。

吉沢：これは彼らは非常に、いわゆるノンアラインメント主義（non-alignment)ということでしておったのですけれども、まあ、これは何でしょうね、1962 年の中共の侵入で、これはノンアラインメントの足が一本崩れたという格好だと思うのですね。それから間もなくネール氏は死んでしまいますね。

渡辺：さきほどお話にあったように 57 年ですか、9 月にネールが来たという時期から前後二、 三年というのは、日本でインド・フアンというのですか、インドびいきというのが非常に高かった時期じゃないかと思うのですけれどもね。

吉沢：まあその当時はいろんな、ミッションが来たりなんかしておったのですけれども。

渡辺：それから、いまおっしゃったようにネールが死んだということもありますが、例の中印紛争とかで大分インドに対する日本人のイメージも変わってきたが、その前の非常に日本人から見れば立派な国だという、そういう時にちょうどネールさんが来たものだから、ちょうどよかったんじゃないですか。

吉沢：58 年に、いまはもう死んだ、ラジェンドラ・プラサドという大統領が来たのですけれどもね。ネールの名前は三歳の童子でも知っているけれども、あれは知っていないということでしたからね。

＜インタビュアーのご紹介＞

（渡辺）渡邉 昭夫（わたなべ あきお、1932 年 8 月 13 日 － ）

平和・安全保障研究所副会長、日本防衛学会名誉会長、東京大学名誉教授。

東京大学文学部国史学科卒業、オーストラリア国立大学にて博士号取得。1966 年から香港大学にて教鞭を取る。その後明治大学助教授、東京大学助教授、同教授、青山学院大学国際政治経済学部教授を経て、2000 年平和・安全保障研究所理事長、東京大学、青山学院大学名誉教授。主な著書に『アジア太平洋の国際関係と日本』（東京大学出版会／1992 年）、『現代日本の国際政策』（編著／有斐閣／1997 年）、『アジア太平洋と新しい地域主義の展開』（編著／千倉書房／2010 年）など。

現代史料出版社と渡辺昭夫先生のご厚意のより抜粋を掲載させて頂きました。月刊インドとは別に、日印協会ホームページの「寄稿・提言」に掲載いたしましたので、ぜひご覧ください。

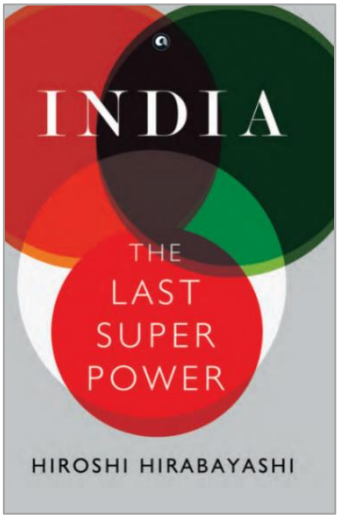
2. 『最後の超大国インド』日本語版から英語版出版へ：出版裏話

Anecdote: "The Last Superpower India", From Japanese Edition to English Version

日印協会理事長　平林 博

はじめに

インドでは新型コロナが猖獗を極めていますが、本年4月、拙書「最後の超大国インド：元大使が見た親日国のすべて」（2017年、日経BP出版）の英訳版が発刊されました。出版社は、デリーの有力な出版社Aleph Book Companyです。ちなみに定価は699ルピーですが、安いのか高いのかはよくわかりません。日本語版でも苦労しましたが、英訳本の出版にも四苦八苦しました。以下は、裏話です。



4月に出版された英訳版の表紙

1. 日本語版の狙いと心がけたこと

日本語版の狙いは、インドが世界においても日本との関係においても重要性を増しつつあるにもかかわらず、わが国におけるインドについての理解不足ひいては誤解が蔓延しているのでこれを是正することでした。いわば、インドを日本人に近づけることでした。

極力読みやすくするために、中央公論社で編集長などを務めた愚弟のアドバイスにより文章は短く、特にリズム感を重視しました。外務省で公電や調書を書き慣れた私にとって、一般の読者に読んでもらうために絶対に避けるべきことは、巷間「外務省文学」と揶揄されるスタイルに堕さないことでした。論理的・分析的だが長文になりがちで読みづらい文章を、極力避けました。

282ページのかなり厚い、かつ内容も盛りだくさんの本ですが、読みやすいとの評価を沢山いただきました。

内容は、第1に、インドの全体像をその歴史、政治、経済、宗教、社会、文化など、タテとヨコから総合的に提示すること、第2に、インドが親日国であることをハイライトするために、仏教伝来から今日に至るまでの日印関係の軌跡を紹介するとともに、インドが親日国になった背景を明らかにすること、第3に日印両国がパートナーシップを強化拡大して国際的に使命・責任を果たすよう提言することとしました。

なお、読者の興味を喚起するためにひと工夫しました。私の長い外交官生活で思い出に残る10のビッグ・イベントを「外交官時代の体験」としてアネクドート風にまとめ、あちこちにちりばめました。

いわゆる自費出版ではない通常の出版ですから、当初、日経BP社は売れるかどうか心配したのでしょう。一部を買い上げてほしいとの要望が提示されました。幸い、日印協会理事で日印関係に長い間大きく貢献されてこられた比良竜虎氏（Hotel Management International社—HMI社長）が拙書の意義を評価され、ご支援下さいました。

拙書の内容が固まるにつれて、今度は出版社が熱心になりました。「面白い」、「意義がある」と判断するに至ったようです。書店でも目立つようにとの配慮から、表紙は金色（費用が掛かる）を交えた魅力あるデザインになりました。あまり例は見ませんが、著名な3人の方々—鈴木修スズキ会長、前田専學東大名誉教授（インド仏教・思想研究の第一人者、公益財団法人中村元東方研究所・東方学院理事長）、著名なジャーナリストで私が課長になる前から勉強会などに招待くださった田原総一朗氏（日印協会顧問）が、それぞれ表紙、裏表紙、背中の3面を推薦文やお名前で飾ってくれました。幸い、初版は1年有余で完売しましたので、第2版が発刊されています。

余談になりますが、田原総一朗氏の勉強会には、現在の日印協会会長の森喜朗元総理、今は亡き加藤紘一、羽田孜両衆議院議員（あとで、それぞれ自民党幹事長、総理大臣になった）、あとで都知事になった舛添要一氏、作曲家の三枝成彰氏、地球物理学・宇宙探査の権威松井孝典氏（現在、千葉工業大学学長）など、多士済々でした。

2.　インド版の出版

2017 年出版の日本語版

私のささやかな願いは、拙書をインド人にも読んでもらうことでした。

著書のタイトル「最後の超大国インド」にはインド人へのメッセージが込められています。

詳細は著書に譲りますが、私の確信によれば、すでに大国であるインドは数十年で「超大国」になります。国の大きさ（面積、人口）、若い人口構成と急速にレベルの上がる教育水準、成長力の大きい経済、4 大文明にさかのぼる文明・文化の深さと世界的な広がり、国際連合ほか国際機関や国際場裏におけるインドの発信力と影響力、核抑止力を含む軍事力などが、超大国になる必要条件であり前提です。

では、なぜ「最後の」超大国なのか。現在、自他共に許す超大国は米国です。中国やロシアは大国と超大国の間にあると思いますが、あえて甘く評価すれば超大国かもしれません。その後に続くのがインドです。インドの後に続く超大国はない、というのが卑見です。人口や資源が豊かなインドネシアやブラジルなど大国になる国々はいくつかありますが、超のつく大国にはならないと考えます。上記に述べた必要条件をかなり欠いているからです。インドを「最後の超大国」とする所以です。

私のインドへのメッセージは、インド人が大国から超大国になることについて自信と責任感・使命感を持つべきだということです。インド人は国内で多くの問題を抱え、それどころではないかもしれません。国外で活躍するインド人は 1,500 万～2,000 万人（日本外務省推計）にも及び、各地で大きな貢献をしていますが、自信はともかく責任感ましてや使命感を持っているかどうか、疑問なしとしません。海外では、とかく自己主張の強いインド人として煙たがれるところがあります。私の夢は、拙書が英訳され、多数のインド人、特に影響力の強い指導層やオピニオンリーダーに読まれることでした。

この夢はついに実現しました。

デリー在住のインドの友人 Deepak Vasdev 氏と出版に詳しい令息 Anirudh Vasdev 氏が、拙書の趣旨に賛同し、ぜひ英訳出版を行いたいと申し出てくれました。同氏はいくつかの日本企業のアドバイザーをしている親日家で、インド人民党（BJP）の外交部門で活躍してきました。現在日印協会事務局長で、ひところまで長い間デリー界隈の日本企業が構成する日本商工会事務局長として、日本とインドのビジネス界の橋渡しをしてきた西本達生氏の友人でもあります。

日経 BP 社は、英訳本の出版につきすぐに賛同し、英訳著作権の私への譲渡のほか、種々のアドバイスをくれました。しかし、同社自らが英訳本をインドで出版することは難しいとのことでしたので、Vasdev 氏にお願いし、出版に詳しいご子息とともに走り回った結果、Aleph 出版が引き受けてくれることになりました。ただし、出版形態は、わが国でいう自費出版に近いもので、ある程度の資金を用意する必要がありました。これも Vasdev 氏が趣旨に賛同する友人企業をいくつか探し出してくれました。

翻訳は、私が尊敬する友人、ネルー大学で日本学を研究・教授してきたこの道の大家 Prem Motwani 元教授が引き受けてくれました。日本語にもよく通じた同氏は、まず自ら英語に翻訳し、それを私がチェックして必要な修正を加えるという手順で、短時間で仕上がりました。権威ある翻訳です。1 点、問題がありました。インドでは、中国やパキスタンとの国境問題があるので、使用するインドの地図について神経質なことです。日本語版でもその点は十分意識し、インド政府が問題にしないような地図を使用しました。しかし、日本語版の地図をそのまま使うことは難しいようで、改めてインド政府がお墨付きを与えた地図の使用権を購入する必要があるとのことでした。Vasdev 氏及び出版社と協議し、結局は地図なしで行くことにしました。英語版を読むのは主としてインド人ですから、インドの地図がなくても問題はないだろうとの結論でした。

ようやく日の目を見た英語版は、目下インド国内で販売されているほか、電子書籍 Kindle 版としてアマゾンなどで国際的に発売されています。

3.　「出版すること」の難しさ

出版というのは、私のように出版界において知名度の低い者には難しいことだとつくづく思います。

私は、外務省退官後これまでに 4 冊を上梓できました。フランスでの体験をもとに書いた①「フランスに学ぶ国家ブランド」（2008 年、朝日新聞出版）、②「首脳外交力：首相、あなた自身がメッセージです！」（2008 年、NHK 出版）、③「あの国以外、世界は親日！：主要国を歴任した元外交官による『新・日本論』」（2015 年、ワニブックス）、そして④「最後の超大国インド：元大使が見た親日国のすべて」です。

毎回、出版社を探して了承いただくのに、数社にアプローチし、足を棒にしました。出版社にとって売れない本を出すことは NG ですから、最初の反応はＮＯが普通です。出版社の方から頼んでくるのは、売れっ子の作家、種々の義理がある学者や研究者などです。

外交官の回想録的なものは、よほど著名な外交官や政治家でなければウンと言ってくれません。学者、研究者、大学図書館などしか興味を示さないからです。そこで、私は体験重視、事実は客観的を心掛けながらも私見・主観をドンドン入れ込むことにしました。いずれの編集者も、ほかの人では絶対に書けないものを書いてほしいと要請してきたからです。

①は、フランスの長所・短所を、国家のブランド、文化、国の栄光と威信、外交力、エネルギーと食糧の安全保障、国の「劣化」という観点から叙述し、日本が学ぶべき諸点を提示することにしました。現在考えても、フランスから学ぶべき教訓として、日本の国としてのブランドを確立して発信することの重要性、フランスで成功した少子化対策の取入れなど有用なメッセージを発信しました。フランスの短所も率直に触れました。旧態依然としたエリート官僚システム、時代遅れになった慣行に固執する労働組合、何かというと政府が出てくる国家優先メンタリティーなどで、いわば反面教師です。

筆者と比良竜虎 日印協会理事（右）

②は、わが国が主催した主要国首脳会議（洞爺湖サミット）の直前に発刊されました。まさに首脳外交の重要性と総理大臣の心得を、私の外交官特に総理官邸（内閣外政審議室長―現在の内閣官房副長官補）の経験をもとに書いたものです。歴代の総理大臣に献本してきました。今や首脳外交の時代、わが国の総理大臣も、諸外国の首脳に伍して堂々と国益を代表し、発信してもらいたいとの念願を込めたものです。副タイトルの「首相、あなた自身がメッセージです！」は、わが国の国際的な発信力は見劣りがするので、発信力の重要性を総理大臣に期待したからです。

③は、日本は立派な国であるのみならず、国際的にも高く評価されており、世界は親日国であふれており、反日感情の強いのは中国、韓国、北朝鮮の 3 カ国のみであることを述べたものです。日本人はそのことを知り、自信を持つべきこと、他方、世界の評価に応えるためにもさらに国内の諸懸案を解決し、国際的な貢献を行うべきとのメッセージを発したものです。

おわりに

外務省退官後、1～2 冊の本を書きたいと思っていましたが、4 冊も発刊できたのは望外の幸せでした。公益財団法人日本国際フォーラム（参与ついで副理事長）、一般財団法人日本戦略研究フォーラム（会長）、早稲田大学大学院客員教授など、知的活動の職に就く幸運に恵まれ、マスコミ・出版業界に影響力のある方々との知己を得たことが大いに貢献したと考えます。

これ以上、本を出版することはないでしょう。自らの経験に基づいて書くという信念からすると、これまで以上の経験を新たに積む可能性はほぼないと思えるからです。これから書くとすれば、短い論文がせいぜいで、あとはエッセーないし雑文程度になるだろうと思うこの頃です。　　（完）

3. インドニュース(2021 年 4 月)
News from India

1　内政

【農業関連法】

4 月 10 日：トーマル農業・農民福祉大臣は、農民らによる反農業関連法抗議活動が継続する中、中央政府は農業団体と話し合う準備ができている、新型コロナウイルスが拡大しているため活動を一時停止するべきだとツイートした。

【ＢＪＰ】

4 月 6 日：モディ首相は、ＢＪＰ創設 41 周年を迎え、オンラインで党内演説を実施した。同首相は、ＢＪＰが選挙マシーンと揶揄されていることに反論し、ＢＪＰとはインド国民の心を掴むための継続的かつ絶え間ない活動であると形容、また、改正市民権法（ＣＡＡ）や農業関連法など中央政府が主導する施策に関して「誤った情報」が流布しているとして、その裏に政治的混乱を招こうとする陰謀が存在すると強調した。

【西ベンガル（WB）州】

4 月 1 日：8 フェーズにかけて実施されるWB州議会議員選挙の第 2 フェーズの投票が実施され、投票率は 86%（速報値）であった（前回選挙時の全フェーズ平均：83.02%）。

4 月 6 日:8 フェーズにかけて実施されるWB州議会議員選挙の第 3 フェーズの投票が実施され、投票率は 77.68%（速報値）であった。（前回選挙時の全フェーズ平均：83.02%）。

4 月 10 日:8 フェーズにかけて実施されるWB州議会議員選挙の第 4 フェーズの投票が実施され、投票率は 79.9%（速報値）であった（前回選挙時の全フェーズ平均：83.02%）。同日、Cooch Behar 地区の投票所において、治安維持部隊として派遣されていた中央産業治安部隊（ＣＩＳＦ）が地元住民を攻撃しているとの噂を受け、300 名以上の住民が投票所に大挙した。ＣＩＳＦの装備を奪おうと試みた者のうち、4 名が発砲を受け死去、4 名が負傷した。同事件を受け、選挙管理委員会（ＥＣ）は、同投票所での投票を停止し、政党関係者の同地区への立ち入りを 72 時間禁止する旨発表した。かかる事態を受け、バナジー州首相がシャー内務大臣の辞任を要求、モディ首相が暴力行為を非難し同事案に係る調査を求めるなど、各政党から非難の声があがった。

4 月 15 日：バナジーWB州首相は、新型コロナウイルス禍における 8 フェーズの投票に反対するとツイートし、選挙管理委員会（ＥＣ）に対し残りの 4 フェーズを一括投票とするよう要求した。同日、ＥＣスポークスパーソンは、すでに発表済の投票日程を変更することは法的に困難であるとして残りのフェーズ一括実施は検討していないと発表した。

4 月 16 日：シャー内務大臣は、ヒンドゥー教徒移民である Mathua などが多数派の地域での選挙キャンペーンにおいて、ＢＪＰ州政権が樹立されれば同コミュニティには 1 週間以内に市民権を付与すると述べるとともに、14 日にWB州で初めて選挙キャンペーンに参加したラーフル・ガンディー・コングレス前総裁につき、選挙終盤での参加であり観光客同然であると批判した。

4 月 17 日:8 フェーズにかけて実施されるWB州議会議員選挙の第 5 フェーズの投票が実施され、投票率は 78.36%（速報値）であった（前回選挙時の全フェーズ平均：83.02%）。

4 月 21 日:8 フェーズにかけて実施されるWB州議会議員選挙の第 6 フェーズの投票が実施され、投票率は 79.09%（速報値）であり、過去 5 フェーズに比べ最も低い投票率であった。

4月26日:8フェーズにかけて実施されるWB州議会議員選挙の第7フェーズの投票が実施され、投票率は75.06%（速報値）であった。
4月29日:8フェーズにかけて実施されるWB州議会議員選挙の第8フェーズの投票が実施され、投票率は75.7%（速報値）であった。

【アッサム（ＡＳ）州】
4月１日：3フェーズにかけて実施されるＡＳ州議会議員選挙の第2フェーズの投票が実施され、投票率は77%（速報値）であった（前回選挙時の全フェーズ平均：84.72%）。
4月6日:3フェーズにかけて実施されるＡＳ州議会議員選挙の最終フェーズの投票が実施され、投票率は82.33%（速報値）であった。（前回選挙時の全フェーズ平均：84.72%）。

【ケララ（ＫＬ）州】
4月６日：ＫＬ州議会議員選挙の投票が実施され、投票率は74.02%（速報値）であった（前回選挙時：77.53%）。

【タミル・ナド（ＴＮ）州】
4月６日：ＴＮ州議会議員選挙の投票が実施され、投票率は71.79%（速報値）であった（前回選挙時：74.81%）。

【プドゥチェリー（ＰＹ）準州】
4月６日：ＰＹ準州議会議員選挙の投票が実施され、投票率は81.64%（速報値）であった（前回選挙時：85.08%）。

【グジャラート（ＧＪ）州】
4月１日：ＧＪ州議会において、結婚による強制的もしくは詐欺まがいの改宗を禁止する Gujarat Freedom of Religion (Amendment) Bill 2021 が可決された。同州法は特定の宗教を対象としたものではないものの、ラブ・ジハード対策目的と見られる。同様の州法を可決したマディヤ・プラデシュ州、ウッタル・プラデシュ州に次いで3州目。（注：ラブ・ジハードとは、イスラム教徒が恋愛や結婚を口実にヒンドゥー教徒の女性を改宗させようとしているというヒンドゥー教徒側の訴え。ラブ・ジハードの禁止は、改正市民権法を可決させたＢＪＰの次なるミッションであるとされている。）

【マハーラーシュトラ（MH）州】
4月５日：ボンベイ高等裁判所が中央捜査局（ＣＢＩ）にデシュムク州内務大臣（国民主義会議派（ＮＣＰ））の汚職疑惑に係る捜査を命じたことを受け、同州内務大臣が辞任を表明した。

2　経済

4月７日：インド準備銀行（RBI）は5～7日の3日間にわたって行われていた金融政策決定会合（ＭＰＣ）の結果を公表したところ、概要以下の通り。

ポイント

1.　金融政策決定会合の結果
- 政策金利（レポ・レート）は4.00%で据え置き。リバースレポレートも3.35%のまま据え置き（5会合連続で据え置き）。据え置きは市場の予想通り。
- 新型コロナウイルスによる経済への影響を緩和し、経済成長を持続的に維持するために必要な期間、金融政策に対する緩和的な姿勢を継続することを決定。その間、インフレ率を目標である4%±2%の範囲内に維持する。

2.　今後の成長見通し
農村部の需要は、2020年度の記録的な農業生産が示すように、引き続き好調である。都市部の需要は、経済活動の正常化を背景に力強く勢いを増しており、また継続的な予防接種による一層推進される。2021年度予算に基づく設備投資への配分増加や、PLI スキームの拡大、設備稼働率の上昇などの財政刺激策により投資需要と輸出拡大が見込まれる。

これらの要因を考慮すると、2021年度の実質GDP成長率は10.5%（第1四半期が26.2%、第2四半期が8.3%、第3四半期が5.4%、第4四半期が10.5%）と予想する。

3　外交

（印米関係）

4月7日：インド外務省は、ケリー米大統領特使（気候変動問題担当）がモディ首相を表敬した旨プレスリリースを発表した。同特使はバイデン大統領からのメッセージを伝達し、野心的な再生可能エネルギー計画を含むインドの気候変動対策を前向きに評価した。

4月20日：現地メディアは、19日、ジャイシャンカル外相がブリケン米国務長官と保健分野に関する協力及び国連安全保障理事会の議題に関する電話会談を実施した旨報じた。

4月26日：インド外務省は、モディ首相がバイデン米大統領と電話会談を実施した旨プレスリリースを発表した。

（印露関係）

4月5日－6日：ラヴロフ露外相がインドを訪問した。

4月28日：インド外務省は、モディ首相がプーチン露大統領と電話会談を実施した旨プレスリリースを発表した。同大統領は、インドにおけるスプートニクVワクチンの緊急使用の承認を高く評価した。また、両首脳は、両国の外務・防衛大臣による2+2を創設することを決定した。

（印・台湾関係）

4月4日：現地メディアは、少なくとも50人の死者を伴った台湾における列車脱線事故に関して、バグチ報道官が「台湾の鉄道事故で多くの人命が失われたことに深く悲しんでいる。犠牲となったご家族の皆様に対して心よりお見舞い申し上げる。負傷者の早期回復をお祈り申し上げる」とツイートした旨報じた。これに対し、呉台湾外交部長は、「心からの心配と哀悼に感謝。政府は、被災者が必要な支援を確実に受けることができるように救助と回復の努力を継続的に取り組んでいる」とリプライした。

（印中関係）

4月10日：インド外務省及び国防省は、9日に第11回インド・中国軍団司令官会議が開催された旨プレスリリースを発表した。

4月30日：インド外務省は、ジャイシャンカル外相は、中国側の要請を受け、新型コロナ対応等について、王毅・中国外交部長と電話会談を行った旨プレスリリースを発表した。

（印・オランダ関係）

4月9日：インド外務省は、モディ首相が3月に再選を果たしたルテ蘭首相とオンラインによる首脳会談を開催した旨プレスリリースを発表した。

（印英関係）

4月19日：インド外務省は、現下の新型コロナ情勢を踏まえ、ジョンソン英国首相の訪印取り止めに関するバグチ報道官のコメントを発表した。

（印・ミャンマー関係）

4月25日：インド外務省は、24日に開催されたASEANリーダーズ・ミーティングにて発表されたミャンマーに関するコンセンサスについてバグチ報道官のコメントを発表した。同コメントでは、「我々はミャンマーに関するASEANによるイニシアチブを歓迎する。我々のミャンマーに対する外交的関与は、これらの取組の強化を目

指すものである。インドは、ミャンマーの友人として、現状の解決を目指す建設的で有意義な役割を果たし続ける。ミャンマーにおける民主化プロセスに対するインドの支持は揺るがない。」と述べた。

（日豪印）
4 月 28 日：現地メディアは、27 日、オンライン形式により日豪印経済大臣会合が開催された旨報じた。梶山経産相、ティーハン豪貿易・観光・投資大臣及びゴヤル商工大臣は、サプライチェーン強靭化に向けた協力について議論し、共同声明を発出した。

（ＢＩＭＳＴＥＣ）
4 月 1 日:インド外務省は、ジャイシャンカル外相が、スリランカ政府がオンラインで主催した第 17 回 BIMSTEC 閣僚会議に参加した旨プレスリリースを発表した。

4　日印関係

4 月 26 日：菅総理は、モディ首相と日印首脳電話会談を実施した。
4 月 30 日：日本政府は、インドにおける新型コロナウイルス感染の急拡大に対する緊急援助を発表した。

今月の注目点：日印首脳電話会議

4 月 26 日、午後 3 時 45 分から約 25 分間、菅義偉内閣総理大臣は、ナレンドラ・モディ・インド首相と電話会談を行ったところ、概要は以下のとおりです。

菅総理大臣から、モディ首相のリーダーシップの下、インドにおける新型コロナの状況が早期に改善することを祈念している旨述べ、新型コロナの克服に向けて日印で協力を緊密化していくことを確認しました。

両首脳は、「自由で開かれたインド太平洋」の実現に向けた日印協力や日米豪印を含む多国間協力の重要性を確認し、法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序の構築に向け、引き続き協力していくことで一致しました。

菅総理大臣から、サイバー、デジタル、脱炭素化、ヘルスケア、連結性強化等の面で協力を更に進展させたい旨述べ、5G や海底ケーブル敷設、産業競争力強化、サプライチェーン多元化、インド北東部開発、特定技能制度などの協力可能性についても言及しました。両首脳は、最近のインド高速鉄道に関する第 12 回合同委員会の開催を含め、高速鉄道事業が着実に進展していることを歓迎し、様々な分野で日印協力を引き続き前進させていくことを確認しました。

菅総理大臣から、海警法を含め、東シナ海や南シナ海での中国の一方的な現状変更の試みの継続・強化を深刻に懸念している旨述べました。

最後に、両首脳は、コロナの状況も見つつ、双方の都合のよいタイミングでの菅総理大臣の訪印を実現することで一致しました。

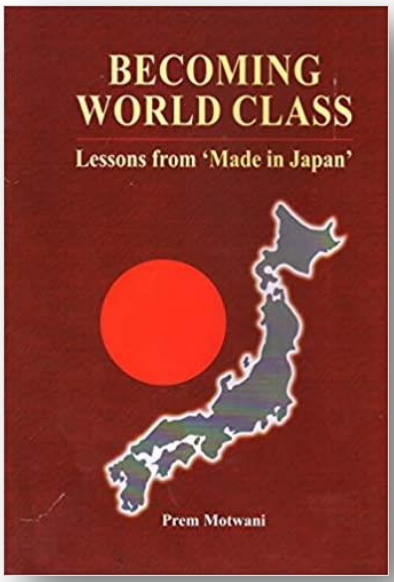
今月の注目点 2：インドにおける新型コロナウイルス感染の急拡大に対する緊急援助

4 月 30 日、我が国政府は、インドにおける新型コロナウイルス感染の急拡大を踏まえた同国政府からの要請を受け、インド側との調整が整えば、酸素濃縮器（300 台）及び人工呼吸器（300 台）を供与する手続きを進めることとしました。　我が国としては、友好国でありパートナーであるインドが新型コロナウイルスに対処する努力を支援すべく緊急援助を行うこととしたものです。

インドにおける新型コロナウイルスの感染状況の緩和・収束に向けて、今後も迅速な支援を検討していきます。

［参考］
4 月 29 日（現地時間）現在、インドにおける新型コロナウイルス感染状況は、累計感染者数 1,837 万 6,524 人、累計死亡者数 20 万 4,832 人に上る。

4. 新刊書紹介
Books Review



§ BECOMING WORLD CLASS –LESSONS FROM MADE IN JAPAN
著者：Prof.Prem Motwani（プレム・モトワニ博士）
出版社：Promilla & Co., Publishers / Bibliophile South Asia
価格：Rs1250.000（2,800 円）　　ISBN 978-93-82337-49-2

表記の著作は元ネルー（JNU）大学教授で日本学、日本語学の権威の一人、プレム・モトワニ博士が最近インドで出版した大作(470 ページ)です。モトワニ博士は長年の日本研究及び日本の大学や企業での研究や訪問を通じて得た幅広いかつ深い知識と経験をもとに、広範囲かつ具体的に論じた大作です。インドが世界クラスの国になるためには製造業の振興が必須不可欠であり、特に日本式の経営哲学・方式及びモノづくりについて日本から学ぶべきことが多いとして、具体的なケーススタディーを交えながら論じています。

評者も親しくしていた故エズラ・ヴォーゲル　ハーバード大学教授の有名な著書「Japan as Number One」に通じるものがあります。

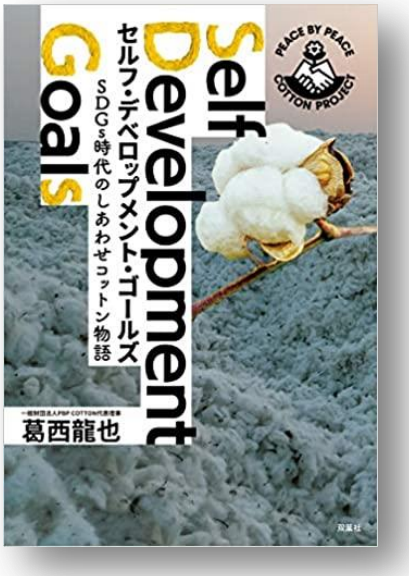
インドや英米で販売されますが、わが国でもインドに進出している企業、あるいは今後進出する企業が知っておくべき教訓があふれており、またインド経済を研究する研究者にとって座右の書となるかと思います。

（日印協会理事長　平林 博）

内容は、下記目次の通りです。

Chapter 1: American Response to Japanese Practices(JMPs)
Chapter2: Japanese Management Practices in India
Chapter3: Development and Evolution of Japanese Management Practices
Chapter4: Japanese Monozukuri: Manufacturing Based on Collective Wisdom
Chapter5: Manufacturing in India-A Cultural Perspective
Chapter6: Rolling out TPM
Chapter7: Conclusion

なお、モトワニ教授からは、購入される場合には下記のメールでモトワニ教授に頼めば手配すると言ってきております。premmotwani03@gmail.com



§『セルフ・デベロップメント・ゴールズ』
SDGs 時代のしあわせコットン物語
著者：葛西 龍也　　出版社：双葉社
価格：1,600 円＋税　　ISBN　978-4-575-31603-2

あなたは安価な木綿製品が、売れれば売れるほどその綿花生産農家で自殺者が増えていることを知っていますか？ 自殺する原因は様々だそうだ。遺伝子組み替えの種子やそれを育てるための化学肥料、農薬を借金して買わされたが、年々収穫が減って、農薬や化学肥料によって土壌や地下水が汚染され、その農家のみならず村全体に悪影響がでて農薬による健康被害で働けなくなり借金が返せなくなるなど。

この本の著者は通販大手のサラリーマンだ。衣料品を扱っていたにもかかわらず、インドの綿花農家の惨状を初めて知ったところから、彼の「オ

ーガニックコットン栽培支援」プロジェクトが始まる。この本はその 12 年の記録だ。

壁にぶちあたりながらも、それを助ける出会いがあり、また壁にぶつかりながら問題を一つ一つ解決していく。生産農家、そこで暮らす子供達、製品を作る人・売る人・使用する人、全てが幸せになっていく循環を目指す。SDGs の 17 項目のうち、15 項目に向き合っていたことが、後にわかる。

「続けることは、耐えること、続けることは変えること。変わろうとする自分であり続けることを目的に、志をともにできる新しい出会いを求めること。そして、変わらない誰かを否定しないこと。知っている人たちだけの村を作って安住しないこと。あくまで自分が永続的発展をしている状態なのかどうかだけを見ること」。著者は「持続可能な開発目標」は、「セルフ・デベロップメント・ゴールズ（自分自身の成長目標）」なのではと語る。

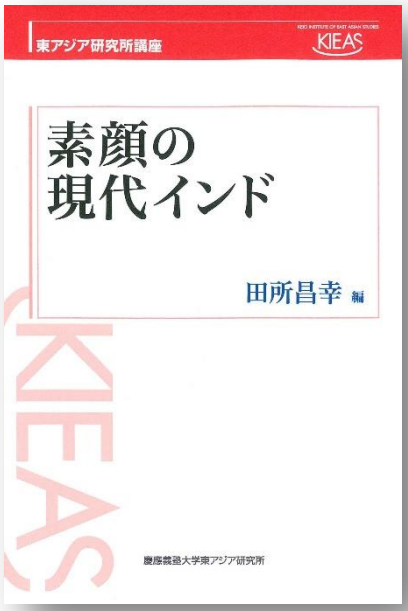
このプロジェクトはコロナ禍の中、今も続いている。一読をお勧めしたい。（日印協会　山本真里枝）

§『素顔の現代インド（東アジア研究所講座）』

著者：田所 昌幸（編者）、執筆者は下記参照　　出版社：慶應義塾大学出版会

価格：1,980 円（本体 1,800 円）　　ISBN 978-4-7664-2740-0

本書は、慶大・東アジア研究所が 2018 年に開催した公開講座「素顔の現代インド」での講演者がその後の情勢を踏まえてアップ・トー・デイトした論文集である。



手前みそになるが、各論文は日印協会のウェブ季刊誌「現代インド・フォーラム」掲載の諸論文に、またインドを総合的に俯瞰している点で拙書「最後の超大国インド」に共通するものがある。

掲載されている論文のテーマ及び著者は下記目次の通りだが、7 人は「現代インド・フォーラム」に投稿された方々である。

いずれの論文も、新進気鋭の学者・研究者からすでに評価や権威を確立した学者・研究者によるものであり、インドや日印関係についての最も新しくかつ権威のある参考書である。（日印協会理事長 平林 博）

＜目次＞

はじめに：田所昌幸
第1章　なぜインドは理解されないのか：湊 一樹
第2章　旅人のナショナリズム：竹中千春
第3章　「朝子」のインド独立運動：笠井亮平
第4章　モディの静かな革命：マリー・ラル
第5章　2000 年代のインドにおける庶民党の盛衰：三輪博樹
第6章　インド外交をどう捉えるか：伊藤 融
第7章　インドと日本の「インド太平洋」：溜 和敏
第8章　インドにおけるビジネスの現状と外資・産業界の課題：山田 剛
第9章　2019 年のカシミール問題：拓 徹

5. 掲示板
Notice

＜ 次回の『月刊インド』の発送日 ＞ 次回6月号の発送は、2021年6月18日(金)を予定しております。

チラシの封入をお考えの方は、日程をご確認のうえ事務局までご連絡下さい。チラシを封入する際には、当該催事の協会会員に対する割引等特典の配慮をお願いしております。チラシ印刷の前にご一考下さい。また、インド関連イベントの後援も行っております。申請方法などお気軽にご連絡ください。

＜ 編集後記 ＞ 本号の表紙と最初の記事は、ともに独立インドの第1代首相ネルーを取り上げました。1952年4月のインドとの国交開始後、2代目の駐インド日本大使を務められた吉澤清次郎氏のご令息吉澤建治様よりご寄贈いただいた現代史料出版社（渡辺昭夫監修）の「現代史を語る〈5〉吉沢清次郎―内政史研究会談話速記録」の抜粋を掲載させていただきました。

ここで故吉澤大使が語られているネルー首相は、親しく接した大使でなければうかがい知れない一面を見せており、ご紹介したいと考えたからです。

表紙のネルー首相の肖像写真は、ネルー首相が離任する吉澤大使に手渡したものですが、これを保存されていた吉澤建治氏が日印協会に寄贈されたものです。下部に、ネルー首相の大使あての贈呈の言葉がありますが、長い年月を経て消えかかっています。現在の駐インド鈴木大使は第27代、協会理事長を務める平林は第20代ですので、吉澤大使は、はるか昔に駐在されたことになります。この写真は国交樹立後の日印関係の初期の歴史を想起させます。協会が時代の流れを超えてきた品を所蔵することで身の引き締まる思いがいたしました。

インドで新型コロナウィルスの変異株が猛威をふるい、感染第2波は収まらず新規感染者は30万人前後。日本でも65歳以上の方のワクチン接種が始まったばかり。感染者も日々増え、6都府県に加え、本日は北海道、岡山、広島の緊急事態宣言対象に追加されました。

お亡くなりになられた方に謹んでお悔やみ申し上げると共に、療養中の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

「月刊インド」では引き続き心が明るくなる記事を会員に提供していこうと思っております。　（編集子）

入会随時受付中

日印協会は、1903年、長岡護美、大隈重信、澁澤榮一の３名が中心となって創設されました。以来、日印の相互理解の促進を目的として、両国の友好親善に関する事業を行ってきました。

現在の協会の活動は、当協会の活動に賛同下さる会員の皆様からの会費によって支えられております。今後もより良い活動を続けるために、当協会の活動にご賛同いただける法人･個人のご入会を歓迎致します。

インドに関心をお持ちのお知り合いの方がいらっしゃいましたら、是非日印協会をアピールして下さい。ご希望により、当協会の活動に関する諸資料をお送りいたします。日印協会の活動に賛同して頂ける多くの法人会員･個人会員のご入会をお待ちしております。

☆年会費:	個人	１口(8,000円)から	☆入会金	個人 2,000円
	学生	１口(4,000円)から		学生 1,000円
	一般法人会員	１口(100,000円)から		法人 5,000円
	特別法人会員	１口(150,000円)から		(一般法人、特別法人会員共に)

月刊インド 2021年5月号（2021年5月21日発行）　発行人 平林 博　編集人 西本達生
発行所　公益財団法人 日印協会
〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町2-1-14 スズコービル2階
Tel: 03-5640-7604　Fax: 03-5640-1576　E-mail: partner@japan-india.com
ホームページ: https://www.japan-india.com/